

事業のコンセプト

「おたから」を継承する意識を持つ

変化の激しい現代の世の中で、全てのおたから（文化遺産）を守り続けることは容易なことではありません。しかし、それを自然に任せて無意識のうちに失っていくことと、意識を持って「これは私たちの地域の大切なたからなのだ」「できるだけ守り伝えていこう」「保存が難しければ、せめてきちんと記録していこう」と継承の努力をしていくこととでは、大きな違いがあります。

現代の暮らしの中でいかす（生かす・活かす）

おたから（文化遺産）は、決して、単に保存することだけが継承の手段ではありません。積極的に紹介され、活用され、あるときは新しくつくられるもののモチーフになり、現代の人々の暮らしの中でいかされていくことこそ、最大の継承の手段であると考えます。

おたからをお互いに認め合う

本事業では、文化遺産の調査・記録作成事業、認定事業、データベースの作成、普及啓発・育成事業などを中心とした事業を行っていきます。調査では、地元の人たちが地元を改めて歩いて、地域で大事にされてきたもの・大事にしていきたいものを再発見・再確認し、写真や位置情報、説明などを記録することで、おたからの拾い上げを行っていきます。認定というのは、市民や地域の人々同士が「これはこの地域にとってこういう意味で大切なものなのだから、萩のおたからですね。」と互いに見せ合って認め合うステップです。

まずは何が地域のおたからなのかを知る

本事業の最終的な目標は、地域のおたからや隠れた魅力を地域の資源・財産として、まちづくりや観光にいかしていくことです。愛着をもって大事にしながらも現代の感性で使いこなしていくためには、まずは何が地域のおたからなのか、それはどこにあるのか、そこにはどんなストーリーがあるのかを萩市民全員が知ることで始まります。

その基礎資料やしぐみをつくるのがこの事業です。

おたからの登録基準

「本物であること」

「一定の時間、継承されてきたものであること」

「本物であること」とは、レプリカ（複製品）であったり、価値の根拠や履歴等があやふやではなく、真正性（オーセンティシティ）が説明できることです。

「一定の時間継承されたものである」とは、個人の次元を超えて価値が共有され、大切に継承されてきたもの（おおむね2世代・50年以上がめやす）です。

これまでに認定されたおたから

2013

- ◆ 浜崎地区のおたから
◆ 港で栄えた商家町
- ◆ 旧松本村地区のおたから
◆ 松陰先生のふるさと、旧松本村
- ◆ むつみ地域のおたから
◆ 恵まれた自然地形と先人から引き継がれてきた田園風景、暮らしの証

2014

- ◆ 旭地域明木地区のおたから
◆ 街道による人・物の交流と思いやりの中で生まれ栄えた明木のおたから
- ◆ 旭地域佐々並地区のおたから
◆ 萩往還の宿場町を中心に栄えた心のよりどころ、佐々並

2015

- ◆ 堀内・平安古・城下町地区のおたから
◆ 維新の志士が往来した当時の風景を今も残すまち
- ◆ 土原地区のおたから
◆ 本松川に育まれた人々と武家の町割り
- ◆ 川上地域のおたから
◆ 阿武川とともに生きた山里の歴史と営み
- ◆ 福栄地域のおたから
◆ 深い山々にいざなわれた信仰の里
- ◆ 三見地区のおたから
◆ 赤間関街道の宿駅町として発達した三見市と街道の変遷

2016

- ◆ 川島・壺場川地区のおたから
◆ 人々の暮らしにとけこんだ藍場川と川島の風景と歴史
- ◆ 壺山・越ヶ浜地区のおたから
◆ 越ヶ浜の自然と漁業集落の暮らしの文化
- ◆ 須佐地域のおたから
◆ 幕末・明治維新と日本の近代化を支えた須佐

2017

- ◆ 田万川地域のおたから
◆ 田万川のおたからを育んだ海彦・里彦・山彦
- ◆ 大井地区のおたから
◆ 古代の息吹が今にいきづく阿牟の里・大井
- ◆ 椿地区のおたから
◆ 萩の玄関口・椿
- ◆ 大島地区のおたから
◆ 恵みの海と火山台地のヤマに育まれた元気な島

2018

- ◆ 江向地区のおたから
◆ 水とともに暮らししてきた城下町・萩の教育と近代化の歴史
- ◆ 相島地区のおたから
◆ 日常とは違った、心豊かになるハートの形の島・相島
- ◆ 見島地区のおたから
◆ 人の温かさに触れる自然と歴史の島・見島
- ◆ 玉江地区のおたから
◆ 海と陸の文化を結び玉江の信仰と祭り
- ◆ 山田地区のおたから
◆ 伝統を次世代へつなぐ地域の輪
- ◆ 木間地区のおたから
◆ 今も昔もお地蔵様が見守る里 木間

これまでに認定された「おたから」は、萩のおたからデータベースで確認！



萩まちじゅう博物館文化遺産活用事業 2019 ▶ 2021

萩のおたから

萩まちじゅう博物館文化遺産活用事業では、地域のおたからを再発見して、「萩のおたから」として地域から推薦し、市民が互いに認め合い、データベースで公開して活用する取り組みを行っています。これからも、萩のおたからを未来に引き継ぐため、萩市民が協力しあい、守り育て、いかす活動を進めていきます。

萩のおたから（文化遺産）とは…

- ◆ 地域らしさを作り出している「もの」や「こと」
- ◆ 地域のことを物語る上で欠かせない「もの」や「こと」
- ◆ 地域のたからとして大切に守り伝えていきたいと思う「もの」や「こと」

令和元年（2019）年度の主な活動



田町地区で調査＆マップ作成



萩光塩学院美術部と連携
おたからイラスト



山口大学 PBL と連携
ハギカラ モニターツアー



地域おたから活用セミナー
「あるもの活かし」
で地域力発信！

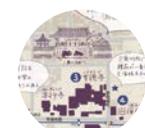


むつみ地域で
おたからモニタリング
ツアー＆ワークショップ

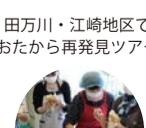


木間地区で
萩ふるさとごはん
プロジェクト

令和2年（2020）年度の主な活動



田万川・江崎地区で
おたから再発見ツアー



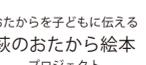
むつみ地域で
地域おたから活用
モニターツアー



大井地区と三見地区で
おたから見守りツアー



地域おたから活用セミナー
地域資源と新しい
価値観をかけ合わせる
これからのツーリズム



おたからを子どもに伝える
萩のおたから絵本
プロジェクト

令和3年（2021）年度の活動



おたから絵本の世界を再現！
おたから再発見ツアー



萩のおたから
ストーリー紹介動画
制作



地域おたから活用人材育成セミナー
共感型ツーリズム
セミナー＆ディスカッション



相島地区で
萩のおたから活用促進
モニターツアー



鶴江・香川津・新川地区で
調査＆マップ作成

令和3年（2021）年度の活動



鶴江・香川津・新川地区で
調査＆マップ作成



福栄地域で
おたから見守りツアー



相島地区で
萩のおたから活用促進
モニターツアー



鶴江・香川津・新川地区で
調査＆マップ作成

◆ 城下町のメインストリート 御成道 田町

田町地区界限（西田町・東田町）は、萩城から続く御成道沿いに形づくられた町人町です。田んぼの中に町を建設したので、田町と呼ばれたということです。御成道は藩主が参勤交代のときに通行した街道で、田町は萩城下の町人町の中心的存在でした。今でも、旧御成道に沿って商店が立ち並び、城下町独特の町割りも残っています。古くからの風情を残す店舗と、新しい店舗との融合がおもしろい街です。お店によっては、古い看板や建物の意匠など見どころも多くあり、あなただけの「おたから」を探して散策するのも楽しいです。

また年に2回、4月と8月頃に、夕日と商店街（御成道）が一直線になり、日没前の数分間、田町の通りをまっすぐ照らします。天候に恵まれ、実際に見ることが出来たら、何かパワーがもらえそうです。

これら城下町のメインストリートならではの風物が、田町のおたからです。

おたからの一例



夕日でだいたい色に染まる 御成道



江戸時代の町家 森井家住宅



柏木薬局のネズミの看板



明治前期創業の津田薬局、古看板



藩政期に触書を掲げた唐樋の札場跡



貝がモチーフの西田町の町印



昭和初期の近代建築 萩たまち郵便局



郷土のために尽力した小林去来顕彰碑



東田町の町印の法被で参加する 佐世天神の祭礼

◆ 三角州の砂丘上に作られた寺町と町人町

萩城下町の北側につくられた寺町地区は、三角州の中では最も標高が高い砂丘の上に立地しており、今も20か所あまりの寺院や墓地が密集しています。広い基地を囲む堀越しに、隣接する寺院の高い屋根がそびえ、迷路のように入り組んだT字路やL字路も見られます。

今魚店町、樽屋町、細工町、米屋町などの町人地が作られ、魚屋や桶屋、米屋などの様々な商人や職人達が住んでいました。

寺院には高い堀と広い境内があり、戦や災害などの有事の際に防御したり避難したりするのに適しているのです。寺町地区は、たくさんの兵士や住民が集合できる場所としての機能を持っていたのではないかとされています。

今も、寺町の特徴が色濃く残るまち並みを楽しむことができます。

三角州の砂丘上に作られた寺町と町人町が、寺町地区のおたからです。

おたからの一例



萩三角州の最高地点（標高）



亨徳寺三門



熊谷家住宅



明倫館遺構 聖廟（海潮寺）



長寿寺十三重塔



端坊のソテツ



三光堂のおまつり



元ミヨシノ醤油の醤油蔵



多越神社

◆ 水を恐れ、水を制し、水の恵みを 受けてきた人々の営み

鶴江・香川津・新川地区は、姥倉運河に面しています。江戸時代の終わりごろまでは、今の新川と鶴江・香川津は陸つづきでした。当時、三角州上の城下町では、度重なる洪水が人々を悩ませていました。そこで、洪水時のあふれた水を小畑方面・日本海へいち早く流して町を守るため、松本川の下流にあたる鶴江台の南側に姥倉運河が掘られました。運河沿いに住む人々は、農作業や漁業に出掛けたり、木材・竹材を運搬したりする際に運河を利用しました。今でも、運河沿いに漁船が並ぶ風景や手漕ぎの舟を用いた「鶴江の渡し」が当時の懐かしい風景を伝えています。また、鶴江台の上には明治時代からナツミカンの栽培が行われています。さらに、四ツ手網を使った「しろお魚」は、姥倉運河周辺でも行われ、早春の萩の風物詩となっています。

水を恐れ、水を制し、水の恵みを受けてきた人々の営みが、鶴江・香川津・新川地区のおたからです。

おたからの一例



姥倉運河



香川津神楽舞



香川津二孝子



鶴江のまちなみ



鶴江台とナツミカン



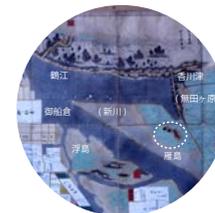
鶴江の渡し



香川津荒神様



消防ポンプ車「新龍」



雁島埋め立ての歴史（雁島開作）
【萩城下町地図（山口県文書館所蔵）部分】